

極小未熟児、とくに1000g以上1250g未満で出生し、幼児期にある子どもの家庭での母子関係（母の子に対する態度）

内 藤 達 男（国立小児病院新生児科）

昭和51年より昭和55年に、1000g以上1250g未満の未熟児で出生し、国立小児病院新生児科でtotal careされ、現在2才2ヶ月から5才2ヶ月（平均3才3ヶ月）の幼児期にあり、大きなハンディキャップをもたない。14名の子どものそれぞれの母親を対象に、「田研，両親態度診断検査」を行ない、母親の子どもへの態度を調査した。

その結果、

(1)約半数の母親の態度に、「積極拒否」，「厳格」，「干渉」，「不安」，「溺愛」，「矛盾」などの異常な偏りがみられた。中でも、「厳格」と「干渉」の傾向がより強く、「支配的」ないしは、「保護的」態度をもって子どもに接している母親が比較的多いことが推測された。一方、

(2)予想された「不安」への偏りは、ほとんどみられず、幼児期にあっては、最早や小さな未熟児であったからといって、そう大きな不安を抱いて子どもを育てている傾向はないと考えられた。そして、(3)14名の母親の態度を平均的態度としてみると、ほぼ「安全」と判定される態度が示さ

れた。

以上の結論として、1000g以上1250g未満の未熟児をもった母親でも、幼児期にある自分の子どもに対しては、大きく偏った態度で接しているということはなさそうで、このことは、好ましい母子関係の一端を示唆するものと考えられた。

昭和59年度研究計画

「極小未熟児、とくに、1251g以上1500g未満の群における家庭での母子関係（母の子に対する態度）」

昭和60年度研究計画

「極小未熟児」（出生体重1500g未満）で出生し、幼児期にある子の家庭での母子関係（母の子に対する態度）」